学びの風便り

リーディングスクール通信 56　R7.12.15

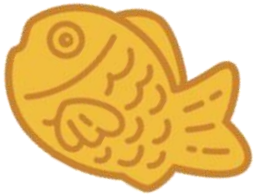
発行：松本市教育委員会　教育研修センター

学びの改革のあゆみ　開明小学校・丸ノ内中学校

開明小学校　「やってみたい！」があふれる学校へ。

先生たちの挑戦とチームワークが、開明小の学びを変えていく

ワクワク楽しむ心が原動力！「自分らしい味」が光る授業づくり



「たい焼き」は開明小学校の「学び」のキャラクター。目指す子ども像「『～たい』をもって挑戦し、ステップアップを楽しむ」から生まれました。今、この「～たい」の精神は、子どもたちだけでなく先生たちの間にも大きく広がっています。毎週の「たい焼きタイム（研究会）」や、日々の情報を伝える「たい焼き通信」など、ネーミングからも伝わってくるのは、先生自身がまず「学びを楽しむ」というワクワクした雰囲気です。

今年度、5回にわたって行われた「たい焼き DAY（授業公開）」では、毎回自ら手を挙げた先生方が授業を公開しました。「フィードバックをもらいたい！」「チャレンジ大歓迎！」という空気が学校全体にあるため、すぐに候補者が決まるのも開明小の特長です。

授業後の振り返りでは、参観した仲間からグループワークや「たい焼きフィードバックシート」を通して、温かいエールや気づきが届けられます。助言者の信州大学・谷内祐樹先生が「先生たち一人一人の『味』が出るのが開明小のよさ」と述べられたように、画一的ではない、先生それぞれの個性が輝く授業づくりを重ねてきました。

「一人じゃない」から頑張れる。対話で深める学びの絆

開明小の改革を支えているのは、先生同士が互いの授業を「自分事」として捉え、親身になって考え合う温かな関係性です。例えば9月の「たい焼きタイム」。2学期に授業を行う先生のプランを、6つのチームに分かれてみんなで検討しました。「先生が教えるより、子どもと一緒に考えてみたら？」「発表会じゃなくて、途中の意見交換の場にしようよ」――。そこには、常に授業者の願いに寄り添い、「どうすればもっと子どもが輝くか」という前向きな対話が溢れていました。

相談を終えた先生が、明るい顔で「自分では気づかなかった視点をもらえて、授業が楽しみになりました！」と話してくれた姿が印象的でした。

一人で抱え込まず、仲間と話すことで頭の中が晴れやかになる。谷内先生が「たい焼きタイム」を「対話によって人と人がつながる良さを実感できる時間」と評価されたように、この豊かな「つながり」こそが、質の高い授業への挑戦を生み出す土壌となっています。

職員室が変われば学校が変わる。高まる「同僚性」と未来への一歩

こうした日々の研修や語り合いの積み重ねは、職員室に目に見える変化をもたらしています。11月には、石川県加賀市への視察に行った5人の先生が、学んだことをブース形式で発表する報告会を開きました。AI ツールも活用しながら熱く語る発表者と、身を乗り出して聞き入る先生たち。そこには「学び合う」プロフェッショナルな集団の姿がありました。

このように、若手からベテランまでがフラットに学び合うことで、教職員間の「同僚性」が格段に高まっています。研究主任の横澤先生は、今の学校の雰囲気をこう語られます。

「『きいてみよう！』がいっぱいある職員室になってきました。コミュニケーションの高まりを一層感じています」

困ったときに「ちょっと聞いて」と言える関係、新しい挑戦を「いいね！」と応援し合える風土。これらが先生たちの主体性（教師エージェンシー）を育て、「みんなが幸せな学校」づくりを力強く支えています。

1月には、先生たちが1年間の挑戦を披露する「大人のたいやきアウトプット DAY」も予定されています。開明小の先生たちの進化はまだまだ止まりません。

丸ノ内中学校「丸ノ内中 Jr.学会」から見える子どもの育ち

松本市立丸ノ内中学校では、「第6回丸ノ内中 Jr.学会」を開催しました。生徒が探究を進めてきたこれまでの学びをポスターセッション形式で発表する場です。この学会は単なる成果発表会ではなく、「エージェンシー※」を育む場として位置づけられ、生徒、小学生、地域の方、保護者が参加しました。

※変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力

1　対話で深まる探究の学び

丸ノ内中 Jr.学会では、3年生の発表5分と質疑応答15分の対話形式で進みます。生徒は原稿を使わず自分の言葉で探究の概要を伝え、続く質疑応答では、多様な参加者からの質問や意見を受けながら考えを深めていきます。15分間の対話を通して生徒は新たな視点に気づき、自分の探究を見直すことで学びを大きく広げる点が、この方式の特徴です。さらに、外部専門家や小学生、保護者など、多様な参加者が対話に加わることで学びは一方向ではなく多方向へと広がり、より豊かな探究の場が生まれています。

2　オープニングで共有した　対話の基盤をつくる「忠恕のメガネ」

丸ノ内中 Jr.学会のオープニングでは、発表に先立って「どのように聴き、どう考えるか」を全校で共有しました。中心となったのは、対話の質を高めるための共通言語として**“忠恕のメガネ”**を示したことです。参加者全員が“どんな視点で質問し、どう考えるか”という基盤をそろえることがねらいです。

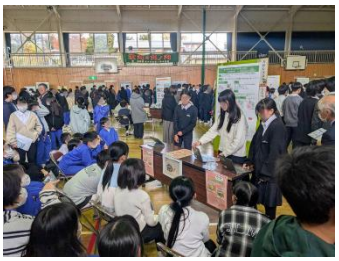
意図的に操作されたグラフや中学1年生の国語の教科書で扱われているルビンの壺の図を例に、見え方が一つでないことや、情報をそのまま受け取らず「本当にそうか？」と問い直す姿勢を確認しました。こうして、**批判・論理・創造**の3つの視点を共有し、探究に向かう思考の土台を全校で整える時間となりました。

≪忠恕のメガネ≫
① 批判のメガネ…情報をそのまま受け取らず、「本当に？」と確かめる
② 論理のメガネ…根拠を整理し、筋道を立てて考える
③ 創造のメガネ…新しい可能性や別の視点を探る

3　３つの事例にみる、生徒の確かな成長

（1）地域につながる探究：ランプシェード班

民芸のランプシェードに興味をもったことから、松本民芸の認知度や後継者不足といった地域課題に気づき、パンフレットを作成して発信しました。実際にアンケートを採って、パンフレットの効果を確認し、「お店の地図を入れてはどうか」という参加者からの助言を次の改善につなげようとする姿に、聞き手と共に学びをつくる姿が見られました。



（2）学校を動かす探究：ファッション班による自由服登校プロジェクト

制服の歴史や意味を調べることから始まり、全校を巻き込んだ「自由服ウィーク」の実施へと発展しました。生徒会や教職員、保護者と話し合いながら計画を進め、実施後は標本調査で実態を数値化し、自己表現の広がりと課題の両方をふり返りました。学校生活を「自分ごと」としてとらえ、制度やルールに働きかける経験となりました。

4　次の世代へと受け継がれる探究文化　～開智小・田川小６年生の声～

「先輩たちの発表に圧倒された。こんな中学生になりたいと思った」

「参加してとても楽しかった。今、私が小学校の総合でやっていることが、中学校でも続けられると思うとわくわくしたし、丸ノ内中学校に行きたいと思った」

会の終わりには、発表を終えた3年生が「楽しかったね」と口々に語り合う姿が見られました。そこには、問いを立て、動き、対話の中で学びを深める探究の楽しさが凝縮されています。丸ノ内中 Jr.学会は、こうした学びの喜びが全校に広がるとともに、後輩へと受け継がれていく場となっています。